

## 寄席の背景音楽を楽しむ

寄席の一日は「一番太鼓」で始まり、「追い出し」で終わる。単なる演芸場の背景音楽としてだけでなく、寄席の「起承転結」、つまり「命の流れ」を感じさせる重厚な儀式そのもののように感じる。

開場を知らせる合図の太鼓「一番太鼓」が鳴る。この音に引かれるようにお客様が会場に入ってくる。入ってきたお客さんは自分の好みの席を探して右往左往しながら落ち着き場所を見つける。

この瞬間の会場のざわつきには独特の緊張感がある。これから何かが始まる、何が始まるのだろうか？様々な気持ちが交錯する。

一番太鼓は、何気なく聞いていると気がつかずに過ぎてしまうが、千客万来を祈願するメッセージになっている。最初にバチで太鼓の縁をかすり「カラッカラッカラ」と音を出した後で、

「ドーン、ドーン、ドンと来い、ドーン、ドーン、ドンと来い、ドンと来いドンと来い・・・」と叩く。

観客席もだいぶ埋まってきて、開演時刻の5分前位になると「二番太鼓」が、期待に胸ふくらませる会場に鳴り響く。太鼓の他に笛の音も加わって、一層雰囲気盛り上がり始める。

お金を持って見に来るお客様を福の神として、「お多福来い来い、お多福来い来い、ステツク天天」と打つと言われているが、なかなかこうは聞こえにくい。

二番太鼓は「もうすぐ始まるよ」という合図で、トイレに行っていたお客さんが気ぜわしく席に戻る。

そして会場にはわずかに残るざわめきの他に、微かに張り詰めた空気も漂い始める。

真打ちになると自分の出囃子を持つことができるが、前座はまだ自分のテーマ音楽を持つことができない。前座が高座に上がる時には「前座の上がり」という出囃子を使うことが多い。

真打ちの落語家が登場する時には、それぞれの噺家が持つ自分の出囃子（曲）に導かれる。昔は長唄や民謡などの一節を使う人が多かったが、近頃では童謡から洋楽までかなり幅が広がってきた。

昔の著名な落語家の出囃子は、古今亭志ん生（一丁入り）、柳家小さん（序の舞）、桂三木助（筑摩）、三遊亭圓生（正札付き）などなど。かたや最近の落語家の出囃子の中には春風亭昇太（デビークロケット）、三遊亭小遊三（ボタンとりボン）、三遊亭白鳥（白鳥の湖）のようなものまである。

見方を変えれば、寄席で一日を楽しむと様々な噺家の様々な出囃子を楽しむことができ、落語のもう一つの楽しみ方にもなる。

仲入り休みに入ると、「お～な～か～い～り～」という甲高い声とともに「仲入り」が流れる。

トイレが混雑するのがこのタイミング。

昔は寄席の照明はろうそくだった。最後に登場する人がろうそくの芯を打ったことから「芯打ち」と言われ、一人前の階級に上がった噺家しかこの役割はできなかった。近頃では寄席のプログラムには「主任」と書かれていて、俗には「トリをとる」と言われることが多いが、昔は「芯打ちする」と言った。

「芯打ちの役割を果たすことができるようになった」と言うのが正しい表現だったようで、後にこれが「真打ち」という文字（言葉）に変わり、今日に至っている。

最後の一席が終わると、太鼓が「ドロドロドロドロ」と鳴り、「あ・り・がとう・ござい・ました～」という甲高い声が響き渡る。お客様が席を立ち、出口に向かって歩き始める頃には太鼓の音色が変わってくる。

「出てけ、出てけ、出てけ」、そしてお客様が木戸を抜けて三々五々家路につくところを見ながら

「てんでんばらばら、てんでんばらばら」と打つ太鼓。そしてお客様が会場からいなくなる頃には「会場が空になったよ～」という意味を込めて太鼓の縁を撫でるようにこすると「カラッ、カラッ、カラッ」。

最後にバチでこすって「ギーッ」と音を立てるが、これは木戸を閉めて錠を下ろすことを意味する擬音。大相撲の櫓太鼓もほぼ同じような内容になっていて、寄席の終了と同じようにこの一瞬を「打ち出し」と言う。近頃の大相撲中継ではあまり耳にしなくなったが、昔のラジオ放送では一日の相撲放送の終了時に「打ち出しは5時53分でした」と言っていた。

寄席の背景音楽の中で最も興味深いのが、会場を出て行くお客様をお送りするこの「追い出し」の場面である。太鼓だけで奏でる前述のような音楽を聴きながら、たっぷり笑った満足感に浸る客が会場を後にする。高座に上がる人にとっても、高座を見に来た人にとっても最高の味わいのひとときになる。

落語そのものの面白さもさることながら、寄席の背景音楽(BGM)を楽しむのもなかなか奥が深くて面白い。

以上